

一般演題 8-5

レクリエーションダイバーの過去10年間における減圧障害治療の推移

芝山正治<sup>1)</sup> 柳下和慶<sup>2)</sup> 外川誠一郎<sup>2)</sup>  
 小島泰史<sup>2)</sup> 加藤 剛<sup>3)</sup> 榎本光裕<sup>2)</sup>  
 岡崎史紘<sup>2)</sup> 小宮正久<sup>2)</sup> 眞野喜洋<sup>2)</sup>

- 1) 駒沢女子大学人間健康学部
- 2) 東京医科歯科大学医学部附属病院 高気圧治療部
- 3) 東京医科歯科大学整形外科

レクリエーションダイバーの減圧障害発症件数は年間1,000件と報告されている。我々の調査では、ダイバー数減少とともに、平均年齢も徐々に高齢化が進み、13年前と比較して7歳上昇の37歳に至っている。

本研究は、東京医科歯科大学で取り扱った減圧障害(DCI)と診断が確定されたケース、または疑いと診断されたケースの割合、および平均年齢や居住地などの推移を調べたので報告する。

【方法】過去10年間に本院を受診し、治療を受けたDCI(疑いを含む)患者を対象とした。

【結果・考察】調査期間は2002年～2011年である。DCIは2,593件(図1)、うち女性は1,198件(46.2%)、インストラクターやガイドダイバーは251件(9.7%)である。平均年齢は36.8±8.7歳、経験年数は6.9±6.8年(0.1～40年)、延べタンク本数は434.8±1,009.3本(2～9,000本)であった。年別の平均年齢は、2002年が35歳であったが、2011年が39歳と4歳上昇した。

DCIの中には、確定診断されたものと、「どちらともいえない」または「疑い」とされたものが含まれ、「どちらともいえない」または「疑い」とされた割合が40%を占めていた(図2)。DCI(疑い含む)の直前ダイビング時の最大水深は、20m以下が3.6%、疑いが18.7%と最大水深が浅くなるに伴い疑いの割合が高くなっている。

患者の居住地は、関東地方が82.5%を占め、近畿地方は7.4%であるが、近年、近畿や中部地方におけるDCI治療病院の減少により増加している傾向を示している。

【まとめ】

DCI件数は年平均で259件であり、平均年齢は10年間で4歳上昇した。DCIの疑いの割合は、40%であった。患者の居住地は、近畿地方で7.4%であるも治療施設の減少で今後は増加する可能性がある。

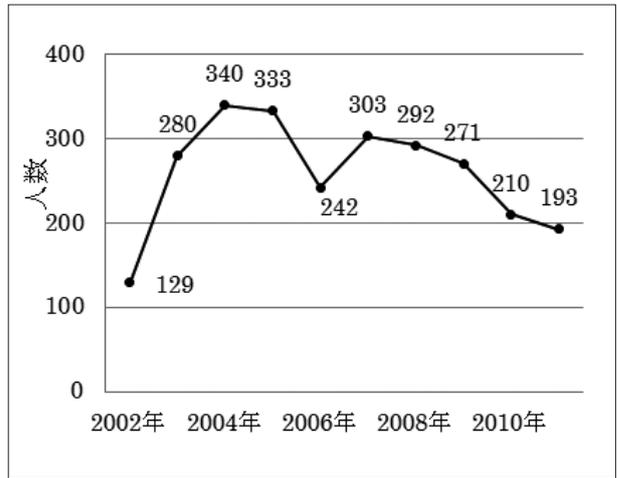


図1 本学を受診したDCI件数の推移

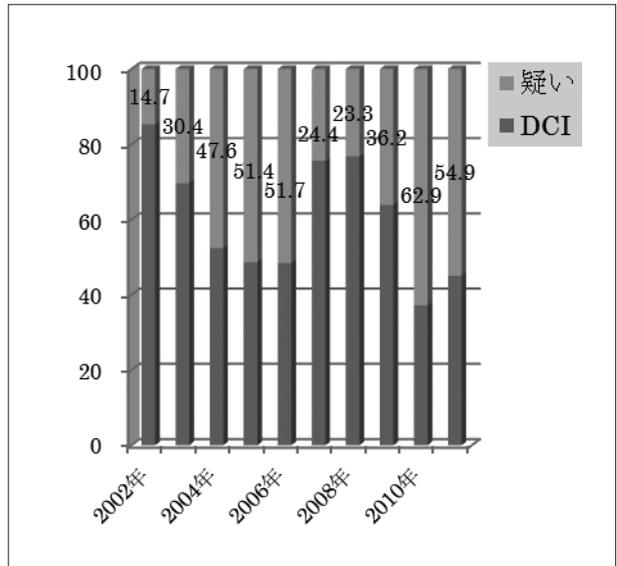


図2 DCIの疑いの割合 (%)

【引用文献】

芝山正治：ダイバーの減圧障害発症件数を推移、駒沢女子大学研究紀要、14：103-109、2007.12.